

「競争」演出による「安定」

——2009 年末ウズベキスタン議会選挙監視体験記——

須田 将

1. 経緯

ウズベキスタンではソ連解体前から、カリモフ現大統領が 20 年を超えて最高指導者としての地位を保持し続けている。大統領と政府に対する監視と抑制均衡が制度上も図られているとはいえ、議会に与えられた役割は限定的である。これまで議会選挙は定期的を実施されてきたが、いずれも反対派を入念に排除したうえでの大統領支持の公認政党同士による「競争選挙」であった⁽¹⁾。近年、複数候補を立てた選挙を実施し、それを操作することで政権を維持する「選挙権威主義体制」が比較政治学では注目され [Shedler 2006]、選挙分析の応用が試みられてきたほか、投票行動を通じて権威主義体制が崩壊する契機としても選挙は注目されてきた。他方、2010 年 4 月のクルグズスタン第二次革命では、大統領の支持基盤として設立され選挙を経て議会内で大多数を占めたドミナント政党（巨大与党）のアクジョル党が、暴力も伴った民衆行動による政権転覆をうけてその存在意義を失った。こうしたことが示すように、権威主義体制下の選挙をどのように位置付けて分析すべきなのかは、政治学が改めて検討すべき問題となっている [宇山 2010: 9-10]。筆者は、事実を誤認したまま数値や理論を振りかざす「研究」は無用だと考えており、まずは現地でつぶさに選挙の実施状況を観察し一見微細でも貴重な情報を得ようという考えから、2009 年末ウズベキスタン議会選挙の監視活動に参加した。

まず、今回の選挙の背景について簡単に触れておきたい。2003 年 4 月の憲法改正により、国会 (Oliy Majlis) が上院 (元老院 Senat) と下院 (立法院 Qonunchilik palatasi) の二院制になったことを受けて、2004-05 年選挙では、上院は各州 (およびカラカルパクスタン共和国、タシュケント市) から各 6 名を、地方人民代議員会議の合同会議により地方議員から選び、他に 16 名を大統領が任命する仕組みに変わった。下院は、2008 年の選挙法改定により、定

⁽¹⁾ ウズベキスタンの政治制度・政治体制と、これまでに実施された各選挙の評価、2009 年末下院選挙の詳しい結果分析については、[須田 2010] を併せて参照されたい。

数を120名から150名に変更、135議席を小選挙区制で選出し、15議席は官製NGOの「環境運動」に自動的に割当てられることになった。そして、選挙に際して全国に135の選挙区と8,447の投票所（44の在外公館投票所を含む）が設けられた⁽²⁾。

選挙監視の打診に際しては、筆者が参加する東洋文庫現代イスラーム研究班中央アジア・グループの湯浅剛氏からウズベキスタン大使館に紹介して頂き、同国政府が招聘する監視員としてアンディジャン・ナマンガン・フェルガナの3州の複数選挙区を監視したいという希望を申し出た⁽³⁾。なお、出発前には、筆者の過去論文の提出を求められ簡単な思想確認が行われ、大使館にも呼ばれて、2時間に亘りやんわりと筆者の過去論文でのウズベキスタン政府批判が厳しすぎるという御説教を賜った。そして、今回の選挙監視で反対派の家族に会いに行くといった勝手な行動をとらないようにという注意が言い渡された。

2. 選挙監視の実践

12月25日の晩にタシュケントに到着すると、空港で筆者の監視に同行する付添人と大学生ボランティアに出迎えられた。付添人は、札幌JICAセンターで研修経験がある年配のエコノミストで、閣僚会議付属予測マクロ経済研究所第一副所長（アンディジャン州出身）であった。タシュケント市内のホテルでは、部屋を直接訪れた中央選挙委員会から監視員証と、選挙関連の規程集や土産物が詰まった鞆を渡された。ここで初めて、筆者が監視を担当するのがフェルガナ州第94バグダード選挙区であることを告げられた。ホテルでテレビを点けると、選挙前の討論番組で社会保障重視を謳う第2党の人民民主党（旧共産党）の代表者が、新興ビジネス層を代表する第1党の自由民主党を批判していた。このように政党がメディアで互いを批判し合う選挙は今回が初めてであり、市民の間でも話題になったが、批判内容はイデオロギーに関するものに集中しており、具体的な政策論争は聞かれなかった。

翌26日は、早朝に空路ナマンガンへ向かい、そこからフェルガナへ自動車で移動した。昼過ぎにフェルガナ市に到着すると、早速フェルガナ州選挙委員会を訪問した。同委員会は労働組合の州本部を用いており、スタッフの多くは労組関係者であった。ソ連時代から全国的に整った組織として、選挙準備に動員しやすいのだろうと思われる。フェルガナ州選挙委員会議長の説明によれば、州内には905の投票所があり（全国最多）、下院には15選挙区に

⁽²⁾ 「環境運動」は、各地方会議から25人ずつ選ばれた代表たち計339人（欠席11人）が参加した共和国大会で、各地方3-5人の複数候補から1ずつと中央評議会執行委員会の候補2人のうち1人を選出した。こうした「環境運動」の選挙については、選挙法では何ら規定がなされていない。

⁽³⁾ 他の日本からの招待監視員には、清水学氏、田中哲二氏、加藤九祚氏、中山恭子参議院議員・元駐ウズベキスタン大使、JICAの稲葉泰氏や、名古屋大学法政国際教育協力センターの鮎京正訓氏が含まれたほか、共同通信や毎日新聞の記者等が同行した。日本人監視員団としての集団行動はなく、各監視員はタシュケント到着後、それぞれが担当する選挙区で監視を行った。



投票

いたのか選挙委員に尋ねてみたところ、気まずい沈黙の後、「30 - 40人」と答える人と「3 - 4人だったのではないか」という人の間で反応は分かれた（第86投票所）。翌日訪問した他の投票所ではいずれも1人もいないという説明をうけ、（地方という事情を差し引いても）不在者投票制度があまり機能しているように思われなかった。

投票日（27日）は早朝から、監視を任されたフェルガナ州第94バグダード選挙区の複数の投票所を巡回して視察した⁽⁵⁾。どの投票所をいつ視察するか決めるのは、フェルガナで合流した現地付添人（市財務部の役人）であった。彼は、どちらかといえば州内の名所やチャイハナへ筆者を連れていくことに熱心であり、投票所は「どれでも勝手に見せる訳にもいかないだろう」と仲間内の会話で漏らしていた。訪問前には必ず携帯電話で事前連絡がなされ、ある投票所に至っては、昼食にアシュ（油分の多いピラフで、客人



選挙委員会に起立で迎えられる

⁽⁴⁾ なお、州人民代議員会議選挙（同日実施）にはフェルガナ州で60の選挙区に185人が立候補（女性35人）。地区／市選挙区人民代議員会議選挙には560区。地区議員には1423人、市議員には358人が立候補した。議会上院は、州人民代議員会議による選出制である。

⁽⁵⁾ 投票日に視察した投票所は、いずれもフェルガナ市から40kmほど離れた場所にあり、①第303投票所・第94バグダード下院選挙委員会、②第291投票所、③第283投票所、④第313投票所（*隣接する第95リシタン選挙区の投票所）である。

歓待の際に振舞われる)まで供された(第283投票所)。筆者が監視にもっと多くの時間を割いてほしいと訴えると、フェルガナの付添人は「もう十分見たでしょう。このまま日本に帰っても誰も悪くは言わないよ」と少し不満気であった。もっとも、投票所内では基本的に制約なく質問できた。投票所でみた選挙委員は、みな生真面目に仕事に取り組んでおり、筆者の一行が投票所を訪れるたびに、選挙委員の方々が作業を中断し起立して敬意を表すには閉口した。別の投票所では、視察を始めたとたん投票者が途絶えたことを不審に思って屋外に出てみると、寒い中、筆者の一行に遠慮して人々が外で列をつくって待っていた(第291投票所)。こうしたことから、体面を取り繕って自然な姿を余所者に見せたがらない人々のメンタリティの強さを感じた。

概して、投票を訪れる若い男性の姿はやや少ないが老人や女性は多く、投票率は実際に高いのではないかという印象をもった⁽⁶⁾。もっとも、報道で投票に向けた市民の期待と熱気が高まっていることが伝えられていたわりには、投票者も選挙委員もどこか醒めており、与えられた役割を粛々とこなしているようにも思われた。ロシアの選挙について指摘されるような国民的な祝祭ムードはあまり感じられず[上野 2009: 25]、初めて投票した新成人たちへのメモ帳やボールペン等のプレゼントのようなものも目にしなかった。

投票は、次の手順で行われた。各有権者が持参した投票招待状および国内旅券を、担当する街路ないしまハッラごとに分かれて座った投票受付係が本人確認のため選挙人名簿と照合し、署名を求めたうえで、投票用紙を手渡す。投票用紙は下院選挙用のものと、同日実施の州と地区の人民代議員選挙用のものの計3種が用意された。投票者はカーテンで仕切られた記入所に入り、投票用紙に記載された候補者氏名の右側にある四角の空欄に任意の印を1つ付け、投票箱に入れる。余った投票用紙は、選挙委員会が角を切り、未使用印を押して選挙区選挙委員会へ送り返す。なお、各投票所で選挙人名簿をみせてもらい

1	2	3	4	5	6	7	8
3190	Хотамов Абдухалиқ Алиқонович	1954	Кулбек				
3191	Хотамова Малика Расулгона	1957	Кулбек				
3192	Хотамов Рашид Абдулқонович	1982	Кулбек				
3193	Хотамова Музаам Фулмонова	1983	Кулбек				
3194	Албаров Носир Хайитович	1961	Кулбек				
3195	Албарова Мастура Эминазаровна	1962	Кулбек				
3196	Юсупов Мадамун Акрамович	1959	Кулбек				
3197	Юсупова Одина Жураевна	1961	Кулбек				
3198	Юсупов Исроил Мадаминович	1986	Кулбек				
3199	Юсупов Икфил Мадаминович	1989	Кулбек				
3200	Хамрақулов Бахром Шерқазиевич	1972	Кулбек				
3201	Хамрақулова Санобар Хасанбоевна	1976	Кулбек				
3202	Абдуллаева Адхам Қаримович	1965	Кулбек				
3203	Ақарова Дилбарон Аъзамовна	1973	Кулбек				
3204	Албаров Расул Хайитович	1965	Кулбек				
3205	Албарова Махбуба Абдулбоевна	1968	Кулбек				
3206	Албаров Зоҳид Расулвич	1988	Кулбек				
3207	Албарова Махаррам Хайитовна	1959	Кулбек				
3208	Хамрақулов Комил Хамрақулович	1956	Кулбек				
3209	Хамрақулова Башоратхон Мамазонусовна	1958	Кулбек				
3210	Хамрақулова Дилрабо Қомилгона	1986	Кулбек				
3211	Хамрақулов Аъзамхон Қомилвич	1983	Кулбек				
3212	Хамрақулова Қомилхон Исакжоновна	1983	Кулбек				
3213	Жураев Саминхон Эргашевич	1969	Кулбек				
3214	Жураева Мухаррамхон Қулибоевна	1973	Кулбек				
3215	Жураев Эргашали Жураевич	1948	Кулбек				
3216	Жураева Инobatхон Собиржоновна	1949	Кулбек				
3217	Жураев Уктамон Эргашевич	1980	Кулбек				
3218	Жураева Барнохон Эргашевна	1982	Кулбек				
3219	Жураев Улулбек Эргашевич	1973	Кулбек				
3220	Жураева Рузуб Ахмаджоновна	1975	Кулбек				
3221	Жураев Давлатхон Эргашевич	1975	Кулбек				

投票者名簿と署名

⁽⁶⁾ 各投票所で、投票者1人につきノートに棒線を1線ずつ書き加えていた集計係に最新の投票率について尋ねたところ、第303投票所では午前8時時点で20%超。第283投票所では、同8時時点で18%、10時時点で60%超。第313投票所(*第95リンタン選挙区の投票所)では、午後2時時点で72%。総じて昼頃までに早目に投票を済ませる人が多いという説明をうけた。

投票用紙受け取り確認の署名を調べたところ、一瞥で同一人物の筆跡と分かる署名が多かった⁽⁷⁾。単に面倒なので家族の代表者一人が全員分の署名をしたのかもしれないが、これでは以前から指摘されてきた代理投票の疑いは払拭されないだろう。実際、複数の投票招待状を持参してきたある青年に対して、付添人が筆者に悟られないように小声で叱り、追い返すのを目撃した（第303投票所）。しばらくして受付係にさりげなく「朝からあのような人は何人きたか」と尋ねてみたところ、しばしの沈黙後、躊躇いがちに「2-3人」という返事があった。

疑問に感じたのは移動投票箱の仕組みである。これは申し出た病人や身体障害者のために、選挙委員が各世帯を巡回して戸口で投票してもらうものだが、投票条件や受付期間について選挙法では何ら規定がなされていないという問題がある（選挙法第41条）。投票箱本体が、選挙不正を防ぐという理由により投票所では半透明なのに対して、こちらは木製の箱である。因みに、2007年末大統領選では、同伴者なしに選挙委員1人が移動投票箱を



複数の投票招待状を持参してきた青年

抱えてアパート中を走りまわる光景がみられ、選挙権のない筆者も投票を呼びかけられたことがあったので、不正投票を防ぐ措置が十分に講じられているかは疑問であった。

この他、各政党の立会人は、政党政治が社会に根付いているという触れ込みがなされており今回選挙の目玉の一つであったが、試しにかれらにいくつか質問を投げかけてみたところ、ある自由民主党代表の立会人は同党員ではなく、選挙区での自党公認の候補者の名も覚えていないことが判明した（第303投票所）。別の政党立会人に至っては、所属政党の綱領の説明が全くできず、傍の選挙委員会の女性に一句ずつ小声で助け舟を出してもらい復唱しなければならなかった（第283投票所）。こうしたことから、地方の地区レベルになると政党組織は脆弱で、政綱などよりも候補者に対する選挙民の個人的な親近感が投票において重要なのではないかと思われた。

投票締切りの午後8時前には、最初に視察した第303投票所に戻り、開票作業を監視した。投票所の選挙委員会議長による投票締切り宣言の後、投票箱が開かれ、移動投票箱の中にあった十数票も加えられた。選挙委員たちが手分けして3種の票の選別が行われた。筆者は選

⁽⁷⁾ この点は、既に前回選挙において同様の指摘がなされている [宇山 2005]。

挙委員の背後で間近に作業を見守ることができたが、ここでは国会議員票はかなり割れていた。誤記入もかなり目立った。従来は退けたい候補者氏名を線で消す消去式が採られており、前回議会選挙から当選させたい候補に印を付ける選択式に変更されたのだが、今回も誤って候補者氏名を消去してしまっている票が数多くみられたのである。おそらくは、年配の多くの投票者が、未だに新しい選挙方式に



(左) 移動投票箱
(右) 投票箱本体

慣れていないのだろう。こうした票が有効か無効かについての最終判断は、投票所の選挙委員会議長に委ねられるため、選り分けておくよう指示がなされた（筆者が開票を監視したこの第303投票所では、無効票は1割5分近くに上った）。選別作業を終えると集計が始められ、最後には結果を投票集計報告書（プロトコール）に記入し選挙区の委員会へ届ける手続きである。だが、筆者の場合は真夜中発の飛行機でタシュケントに戻らなくてはならない日程が予め組まれてしまっており、遺憾ながら集計作業を最後まで見届けることはできなかった。フェルガナ市内のホテルに戻ると、国営テレビ局の女性記者が取材を申し込んできた。ボランティアはタシュケントの国家安全保障局に許可をとらねばならないと慌てて携帯電話をかけ始め、ウズベキスタンがいかに自由で民主的か筆者に印象づけようと苦慮する一方で、ちぐはぐな対応をしていることには気づいていない様子であった。

最終日の28日には、筆者希望により駆け足でタシュケントの諸政党・団体本部を訪問し、



開票作業

幹部と面談した。「環境運動」（旧学校校舎の1階）は急拵えという印象が拭えず、事務所設備がまだ整っていなかった。丁度、別室では地方の活動家数人が集められ、本部から手渡された年間計画表を確認していたところであった。前日かれら自身が選出した議員の経歴について幹部に尋ねてみたところ、選挙委員会の公式発表があるまでは口外

できないと断られてしまい、応対は NGO らしからず杓子定規であった。この他、アドラト党（医療施設の最上階）・人民民主党（旧共産党中央委員会の3階）・自由民主党（近代的に修築された建物一棟を丸ごと使用）を訪れたが、暗くなってもスタッフが忙しそうに働いていた自由民主党を除き、いずれも投票日翌日だというのに事務所が閑散としていたのが印象的であった。

その晩、ウズベキスタン外務省主催で開かれたレセプションでは、アンディジャン事件で同国政府を擁護する調査結果を発表したロンドン大学のシリル・アキナー氏や、親ウズベキスタン政府の姿勢で知られるジョンズ・ホプキンス大学中央アジア・コーカサス研究所のフレデリック・スター氏を、大勢の政府関係者や報道陣がとり囲み歓待していた。最終結果が公表されないうちからアキナー氏やスター氏がウズベキスタンの民主化について惜しめない賛辞を述べ、ウズベキスタンの人々がそれに追従しているのを見せつけられて、筆者はすっかり興ざめてしまった。大半の監視員はこのレセプション直後に帰国してしまい、30日になってからの選挙結果公表には立ち会わなかった。

中央選挙委員会によれば、全国投票率は87%。39の選挙区で過半数の票を獲得する候補者がおらず、2010年1月10日に決選投票が行われた（第2回投票率79.7%）。筆者が監視した第94バグダード選挙区でも、過半数を得た候補者はいなかった。自由民主党の前職（同党の政治評議会執行委員会副議長、下院の予算・経済改革委員会委員でパフタバンク取締役会議長でもあった）タシュマトフに対して、アドラト党の新人（フェルガナ州裁判所主任専門官）ミルザアリエフが第1回目投票で予想外に善戦したのであった。筆者が監視した第303、第291、第283投票所の第1回目投票でミルザアリエフは最多得票であった。だが、翌年の決選投票では、タシュマトフが再選された。自由民主党は決選投票において全国で20議席を上積みし、第1回目投票で9議席あった人民民主党との差を21議席に広げたが、過半には届かず、議席占有率は3割5分に留まり、ドミナント政党となるには至らなかった。

3. 評価

以下は、選挙監視についての評価である。もとより監視員個人によるある特定選挙区の投票日とその前後の視察だけでは、当該選挙全体ましてや一国の民主化度について評価はできない（それができるとするのがアキナー氏やスター氏のような人々である）。2004年のウクライナのやり直し大統領選挙では史上最多の8千人から1万人が国際監視団に参加したといわれるが、そこでもむしろ国内の市民団体による日常的な監視のほうが選挙の公正な実施において決定的だったのではないかと思われる。民主主義が確立していない国々に関しては、投票に至るまでの長い選挙プロセスが重要なのであって、野党が政党登録できるか、候補者選定において政権に都合の悪い人物が排除されていないか、報道は中立的かといった問題に

ついて、外国人監視員が滞在して監視できることは限られている。ましてや、今回のウズベキスタン下院選挙では、政府招聘の監視員の大半はきわめて短時間の投票所視察を行い、結果公表もまたずに帰国し、翌年の決選投票も監視しなかったのである。民主的選挙の最低限の基準も満たしていないとして今回も監視員を送らず、アナリストから構成される選挙アセスメント・チームを派遣した欧州安全保障協力機構の民主制度・人権事務所は、選挙は真の政治的競争を著しく欠くと指摘し、改善が望まれると結論づけた [OSCE/ODIHR 2010]。

ウズベキスタンの場合、政府に批判的な市民団体が認可を取り消され、野党が非合法化されて選挙参加を封じられているため、選挙プロセスの最初歩で問題は既に明らかであった。今回選挙で苦情や不正の報告は一切なかったという中央選挙委員会の主張はいかにも不自然であり、開かれた選挙に取り組む気のなさをかえって物語る。各選挙区単位での候補ごとの得票数すら公表されていないので、筆者が監視した投票所での集計結果も（次頁表参照）、既に文書庫に入れられた資料から「格別の配慮」を得て個人的に教えていただかねばならなかったのである。出口調査も禁止されている以上、選挙操作の証拠を示すことも、逆にそれを否定することもできないのだが、こうした状況を続けることがウズベキスタンにとって本当に望ましいのだろうか。

世界に目を向けると、2010年末から11年初めにかけて、チュニジアやエジプトでは雇用・腐敗への処罰・言論の自由を求めるデモにより長期政権が倒壊した。ドミナント政党に支えられた大統領中心の体制であっても、国内で反対派がかろうじて一定の批判活動を行っていた中東の両国やクルグズスタンで政権が倒れていることは、結局は政治指導者による警察・公安機関や軍の掌握、エリートの結束、経済の安定が権威主義体制の存続にとって枢要だということを示している。あらゆる反対派の国内活動を封じ、大統領支持政党のみが参加する選挙で「競争」を演出するウズベキスタンの権威主義体制は、一見「安定」しているかのようである。だが、そのような「安定」は、潜在的な不安定を覆い隠しているに過ぎない。真の選択肢が提供されない「競争選挙」を続けても、本来は紛争を平和裏に調停する機能をもつ筈の制度の信頼性を損なうだけだとすれば、それこそ非常に不幸なことだと思われる。

参考文献

OSCE/ODIHR 2010. “Republic of Uzbekistan: Parliamentary Elections, 27 December 2009. OSCE/ODIHR Election Assessment Mission Final Report” (Warsaw, 7 April 2010), URL: <http://www.osce.org/odihr/elections/67597>, 閲覧日：2010年12月10日。

Shedler, Andreas (ed.). 2006. *Electoral Authoritarianism: The Dynamics of Unfree Competition*, Boulder: Lynne Rienner Publishers.

上野俊彦 2009 「ロシアにおける選挙監視」『国際情勢』79(2)、247-273頁。

宇山智彦 2005 「ウズベキスタン議会選挙監視体験記」『スラブ研究センターニュース』101、
URL: <http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/news/101/news101-essay3.html>, 閲覧日: 2010年12月10日。

宇山智彦 2010 「クルグズスタン（キルギス）の再チャレンジ革命：民主化・暴力・外圧」、
URL: <http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/center/essay/20100420.pdf>, 閲覧日: 2010年12月10日。

須田将 2010 「ウズベキスタン」『中東・イスラーム諸国 民主化ハンドブック 2010』人間文化研究機構地域研究推進事業「イスラーム地域研究」東京大学拠点グループ2, pp. 334-357. URL: http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~dbmedm06/me_d13n/database/uzbekistan.html, 閲覧日: 2010年12月10日。

2009年 年末下院選挙最終結果

	獲得議席	前回の獲得議席
自由民主党	53 (35.3%)	41 (34.2%)
人民民主党	32 (21.3%)	32 (26.6%)
ミッリィ・ティクラニシュ	31 (20.7%)	28 (23.4%) [*]
アドラト党	19 (12.7%)	9 (7.5%)
環境運動	15 (10%)	—
選挙民のイニシアティヴ・グループ (今回選挙から廃止)		10 (8.3%)

[*] 2008年6月に合併したフィドコルラル党を含む

下院選挙

	自由民主党 タシュマトフ	アドラト党 ミルザアリエフ	人民民主党 イバディノフ	ミツリイ・ティ クラニシュ党 ホルベコフ	有効票	無効票	投票 総数	有権者 総数
283 投票所	612	2,329	191	89	3,221 (98.7%)	44 (1.3%)	3,265 (97.7%)	3,343
291 投票所	169	1,691	32	32	1,924 (94.8%)	106 (5.2%)	2,030 (74.9%)	2,709
303 投票所	595	645	286	120	1,646 (85.9%)	270 (14.1%)	1,916 (75.5%)	2,539

[*] 決選投票の結果、タシュマトフが再選された。

州人民代議員会議選挙

	自由民主党 カラバエフ	人民民主党 フルバエフ	アドラト党 エショノヴァ
283 投票所	825	2,183	181
291 投票所	1,423	436	44

地区人民代議員会議選挙

	自由民主党 アスタクロフ	アドラト党 ティラエフ
303 投票所	975	645
313 投票所	647	1,080

(北海道大学大学院文学研究科博士後期課程・日本学術振興会特別研究員 DC)

